



あなたのそばに人権相談員がいます!!

発行人 牧坂秀敏・小宮 豊

人権プラザ便り[結び]

(公財)東京都人権啓発センター 〒111-0023 台東区橋場 1-1-6 TEL.03-5808-9682 (直通)

**人と人のつながりが実感できる場所づくり
協働で安心して生きられるまちづくりを**

第3弾!!

秋田県・藤里町の 取り組みに学ぶ



◆「自殺の多い町」から「自殺対策の町」へ

32号で、藤里町における「ひきこもりのパワーでまちおこし」の取り組みを紹介しました。藤里町が全国的にも注目される取り組みの背景には、人間ドラマに彩られ幾重にも紡がれた「藤里物語」があったのです。「こころの健康づくりと『生きていこう!』のためのパンフレット」、「藤里物語(Ⅲ)」(2009年3月、藤里町・秋田大学医学部健康増進医学分野作成)で知りました。

冒頭、「こころの健康づくりと自殺予防のためには、家族はもちろん、地域のつながりも大事だということ、そして、辛いときは「辛い」と、死にたいくらい辛いときは「もう死にたいくらい辛い」と誰かに語れる／聴ける絆が必要だということに私たちは、今、たどり着きました」とあります。

パンフレットは、町民に尋ねます。「最近よく眠れますか?」(第1幕)、「飲み過ぎていませんか?」(第2幕)、「死にたいと思うくらい辛くなっていますか?」(第3幕)。隣近所あるいは友人との語らいで、うつ病やアルコール依存症などへの理解や気づき、セルフチェックができるように構成されています。

そして、第4幕は『「自殺の多い町」から「自殺対策の町」へ』。秋田県は「自殺率」全国一といわれてきました。藤里町でも、1989年からの10年間で31人、1999年からの10年間で25人の方が自死で亡くなっています。これを2004年からの5

年間でみると、7人と減少しています。

「藤里町がこころの健康づくり・自殺予防活動のモデル地区として取り組んだのが平成14(2002)年から平成16(2004)年の3年間でした。その間4人→2人→0人と減少し、その翌年も1人でした」と記されています。

第4幕は、その取り組みに深くかかわってきた保健師、社会福祉協議会(社協)、そして、住民自身の活動団体「心といのちを考える会」(2000年10月発足)からのメッセージです。

関わる人たちの熱意が状況を変えていった様子がかがえます。保健師が10年を振り返って、「遺族がいるから自殺対策は控えたほうがいい、保健師は老人対策に頑張ればよいという空気が漂う中で、なんとかしたいとの思いで取り組んできた結果、町や職場での理解者が増えてきました。

さらに、後押しをしてくれている『心といのちを考える会』の人たち、秋田大学や各医療機関・関係機関を始めとする、たくさんの方々の惜しみない支援と指導のおかげで、うつ病やその対応についての理解者も増え、年々自殺対策への関心も高まり、自殺者が減少してきました」と。

次に紹介する保健師の心とまわせる素敵なメッセージは、藤里物語が育んだものだといえます。

「『ことばは心を伝える』と言います。一人一人が思いやりの心と言葉で、声かけをしてくれることを、そして、この活動が今後も町民皆の思いで継続していきますように願っています」。

◆一人の不幸も見逃さない!

現在、ひきこもり者支援事業を展開している藤里町社協は、藤里物語をどのように紡いでいった

のでしょうか。「社協は、地域の福祉ニーズをていねいに拾い上げ、福祉施策や福祉サービスの展開につなげることを心がけています」という言葉に、「一人の不幸も見逃さない活動」が連綿と息づいていることを感じます。

「6年前、うつ病で家族も参っていたAさんを支援したのが始まりでした。社協がそこまでやる必要があるのかとか、きりが無いとか、そんな声もありました。社協が出来る範囲での精一杯の支援をするだけだという方針を守り、常に、これ以上の支援は出来ない限界が来ると覚悟をしていましたが、不思議な事にその限界を感じないまま、今日に至っています。

日中を社協が全力で支援すると、介護はもう無理だと言っていた家族や近隣の方が夜間の支援を受け持ってくれるようになります。そして、うつ病から回復した人や関わった家族や近隣の方が、頼りになる支援者になってくれます」と。

問題が目の前で起きていても、やる気のない関係機関であれば、「できない理由」を並べ立てたり、縦割りの制度を持ち出して、相談者をたらい回しにしたりします。「ひとつひとつの声にきちんと向き合う」という基本スタンスが多くの方の共感を呼び、また住民自身もサービスの受け手からまちづくりの主役になっていきます。確実な手ごたえが、社協職員たちのモチベーションを一層高めます。

◆いのちをつなぐ1杯のコーヒー、赤ちょうちん

一方、「心といのちを考える会」の活動はとてもユニークです。「つながり」を実感できる場所を作ろうとコーヒーサロン「よってたもれ」の運営を2004年4月に始めます。「よってってください」という意味のとおり「よってたもれ」には、買い物帰りの主婦や一人暮らしのお年寄りなどさまざまな人たちが訪れ、会員と一緒にコーヒーを飲みながら世間話に花を咲かせる。時には、職場や家庭での悩みなど深刻な相談を持って訪れる人もいます。年に数回のフォーラムや講演会の開催なども行っています。

2008年5月からは、赤ちょうちん「よってたもれ」の運営を開始。各地区集会所で夜に飲み会をするわけですが、なぜ赤ちょうちん？！

「悩みを抱えてしまうのは男性のほうが得意みたいです。そして男性は少しアルコールが入らないと、口が回らないようにできているみたいです」。なるほど、赤ちょうちんでもいのちをつなぐ。

「農作業はかつて協働で行われていました。…その農作業が機械化されると、こぞって農機具を買いました。重労働は機械がやってくれる、これほど楽なことはありませんから。そうすると村の協働はなくなり共同体も崩れました。共同体は人の「つながり」が密接なだけに、干渉されることも多くあります。そのわずらわしさからも開放され、私たちは農村にいながら都会のように独りで生きる心地よさを一途に求めてきたように思います。

独りになってしまうと、人生の中の少しの波風も大きなうねりに感じるようになります。自ら命を絶つということは、その原因はいろいろあるにしても、一人で悩みを抱えてしまうからではないか。これまであった農村の共同体がしがらみだらけで嫌だとしたら、新たなつながり方を考えなければならないのではないか。

サロンは、こうした会員同士の話し合いの中から生まれました。

◆人を思いやる心で、新たなつながりを

ここで指摘された、農村共同体の崩壊と農村の都市化による人間関係の希薄さ（裏返しとしての一人の居心地の良さ）に潜む農村が抱えている問題は、農村に限らず、実は都市にも共通していることはいまでもありません。「考える会」の目指すところは、つながりの実感で「安心して生きていくことができる町」をつくること、と明快です。これは私たちの共通目標でもあります。

一人ひとりの人生に物語があり、住んでいる地域にも物語があります。物語は語られることではじめて人に伝わります。人は一人では生きていきません。私たちも、身近な人たちとの新たなつながりのなかで、交流を深め、語り合う場を作り出すことはできます。人を気遣う、思いやる心が、新たな物語を喜びに満ちたものに紡いでいくだろうと期待されます。

※『藤里物語Ⅲ』は、インターネットからダウンロードできます。関心のある方は、検索してください。